イメージ画にみる母と娘の関係：母親への「依存・独立・葛藤尺度」との関連から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 『生活科学研究誌』編集委員会 公開日: 2024-09-09 キーワード (Ja): 母娘関係, 依存, 独立, 葛藤, イメージ画 キーワード (En): Mother and Daughter Relationship, depedence, independence, coflict, draw a image 作成者: 根垣, 奈未, 岩堂, 美智子 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学, 大阪市立大学
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20180308-199

Title	イメージ画にみる母と娘の関係 ： 母親への「依存・独立・葛藤尺度」との関連から
Author	根垣, 奈未 / 岩堂, 美智子
Citation	生活科学研究誌. 1 巻, p.157-168.
Issue Date	2002-12
ISSN	1348-6926
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	『生活科学研究誌』編集委員会

生活科学研究誌・Vol. 1 (2002)

イメージ画にみる母と娘の関係

－母親への「依存・独立・葛藤尺度」との関連から－

根垣奈未，岩堂美智子

大阪市立大学大学院生活科学研究科

(平成14年8月9日受付：平成14年12月2日受理)

Relationships between mothers and daughters seen in drawn images

— From the relation of "dependence, independence and conflict scales" towards mothers—

Nami Negaki and Michiko Iwado

Graduate School of Human Life Science, Osaka City University

Summary

503 young women as test subjects, were assigned to draw images of relationships between themselves and their mothers "in their childhood" and "at present", as well, they were asked to fill out a questionnaire consisting of 28 items that scale dependence, independence and conflict toward a parent. The results show the relation of the images and the score of the three scales mounted that there are no significant differences statically with either the three scales or the two periods of time, between even a person who drew an image like "me, trying to become one (unify) with my mother" that can be seen as a deceptively too dependent relationship and a person who drew a "my mother and I, independent form each other" image.

We observed that the results show that relationships between Japanese mothers and daughters has original direction which defers from western sense of values.

Keywords：母娘関係 *Mother and Daughter Relationship,* 依存 *dependence,* 独立 *independence,* 葛藤 *conflict,* イメージ画 *draw a image*

問題

母と娘の関係は今日の日本の臨床心理学における重要なテーマである。では「母と娘」、そこにある関係の特殊性とはいったい何なのか。そのひとつはNaomi,R,L.(1990)の定義する、祖母・母・娘・孫娘からなり家族の歴史を支える女性の繋がりである「母の系列」が挙げられる[1]。すなわち、母と娘の間には、決して二者関係で終わることのない連綿と続く女性の繋がりが存在するのである。娘にとっての母は絶対的な「母」であるが、次第に娘は、母が「娘でもある母」であることに気づき、そして自分自身が「母」にもなることに気づいていく。娘は人生のその時々において、様々な視点で母親を捉えることになる。そのような意味で、「母と娘」の関係は特殊なものであると言えるだろう。

では果たして、その特殊な「母と娘」の関係性はどのような距離感をもって動いているのだろうか。

そもそも「母子密着」と言うように、母と子の関係には常にどこか「離れられない」イメージが付きまとう。母親からの溺愛、子どもからの強い依存は、子どもの成長にしたがって確実に問題視されていく。母と子の関係は、物理的にも心理的にも近すぎては精神的距離を保てないために、さまざまな問題を引き起こす、ということ

だろう。いったい「物理的にも心理的にもほどよい距離」とはどのようなものを指すのか。その距離は近すぎてはいけないが、遠すぎてもいけないのである。特に、母と娘という特殊な関係性において、両者の適切な距離とはどういうものなのだろうか。

人と人との関係という目に見えないものを、イメージとして集約し表現する目的で、やまだ(1988)[2]は幼い頃と、現在、両時期の「私と母の関係」をイメージして描いてもらった女子大学生の絵を考察している。その中で特徴的に見られたのは、母が娘を（もしくは娘が母を）包みこむ形である「包む母と入れ子の私」という構図であった。そして、その構図を現在の「私と母の関係」においても描く被験者が多くいたのである。

「包む母と入れ子の私」の構図において、母と私の距離はゼロである。母と私はまさに一体化している。それは、現在における関係を描いている、すなわち青年期から成人期にいたる娘と母親との関係を描いたものとして捉えると、まさに「密着」した関係に見えてくる。しかし、このイメージにおける母親との密着、一体感は、前述したような「物理的にも心理的にも近すぎては精神的距離を保てないために、さまざまな問題を引き起こす」関係であると、果たして一概に言ってしまえるだろうか。

青年期とは、Blos(1962,1967)[3]及び長尾(1991)[4]のモデルに従えば、第二の分離－個体化の時期である。第二次性徴を契機に思春期を迎える青年は家族への依存から独立し、幼児期的対象から情緒的に離脱することによって、大人社会への参加を果たしていく。そこには独立欲求と依存欲求の間に起こる強い葛藤という再接近期危機が存在する。その後、この課題を乗り越えながら「練習期」を経て、青年期の発達はやっと「個体化期」にいたる。つまり、青年期はようやく母親と物理的にも心理的にも分離して、ほどよい関係を形成する段階であり、融合ではありえない。

では、青年期における「包む母と入れ子の私」はいったい何を意味しているのだろうか。それは個体化期に未だ到達しない練習期、もしくは再接近期にとどまることを意味しているのだろうか。

ここで、やまだは母子の関係性の変化において、「もしかすると、入れ子が成長して『出て行く』のが普通で常識的なかたちだと考えていたのは、実は幻想なのかもしれない。別の視点から見れば、しかも細かい違いは別にして大きくみれば、本当は『変わらない私』の構図のほうが広い視野をもつ、一般的で基本的な形なのだと考えることもできよう。」という新しい視点を提示している[5]。そして、「『包む母と入れ子の私』の像を、従来主に用いられてきた西欧の枠組みで『未分化』『依存』とネガティブな概念でとらえ、『未分化から分化へ』『依存から独立へ』向かわねばならないとする発達様式」への疑問を投げかける[6]。

そこで本研究では、「包む母と入れ子の私」のように、目に見えて密着した母子関係のイメージが、果たして実際に子から母への依存や独立心とどのように関係しているのかを調査することとした。

調査方法

1 対象

大阪府下の女子大学生261名(回収数243、回収率93%)、女子専門学校生416名（回収数377、回収率91%)、計677名（有効標本数503、有効回収率74%)。年齢幅18～29歳、平均年齢19.9歳。

2 手続き

大学等の講義の時間など集団場面において調査用紙を配布、実施、回収した。なお、調査は無記名で行った。

3 調査内容

1)イメージ画

「あなたとお母さんの関係を思い描いて、自由に絵に描いてください。絵は具体的なものでも、空想でも、記号のようなものを使ってもどんな形でも構いません。また、絵についての説明も以下の欄に付け加えて下さい。」という教示のもとに、B5版の上質紙に鉛筆などで、幼い頃の母との関係と現在のものと2種類の絵を描いてもらう。用紙の向きや描画方法などは全く個人にまかされており、自由なものとした。

2)質問紙

青年期における親への依存欲求・独立欲求・葛藤の発達的変化を測定するために作られた、井上(1999)[7]の、尺度を用いた。これは、幼い頃からの発達的な母への感情を、現在の視点でとらえる本研究にも適しているのではないかと考える。なお、依存欲求・独立欲求・葛藤の各尺度の信頼性は順に$\alpha=.85$, $\alpha=.83$, $\alpha=.77$となり、高い信頼性が得られている。依存欲求尺度は、「親には私のことを見守っていて欲しい」など、親とは心理的ないい関係を保ち、困難な課題にぶつかった時や苦しい時に援助してもらいたいという欲求が反映されている。葛藤尺度は、「自分には自分の言い分があるのに、親はまともに取り合ってくれない」など、自己の主体性を発揮しようとしても、親がそれを認めようとしなかったり、親の考えによって束縛されたりするために、思い通りに

行動することができないという葛藤が反映されている。独立欲求尺度は、「親の考えに合わせるよりも自分の思うとおりにしたい」など、親からの束縛や制限にとらわれることなく、親とは異なる自己の独自性を保ち、自己実現をはかろうとする欲求が反映されている。以上、3つの独立した尺度からなる28項目からなる質問に対し、各項目に「全くそう思う」から「全くそう思わない」までの5段階で評価を求めた。

結果

1 尺度得点

依存・独立・葛藤の各尺度からなる28項目の質問に対しては、井上に従い、「全くそう思う」から「全くそう思わない」までの5段階の評定に、順に5点から1点までの得点を与えて点数化した。そして、依存欲求尺度に含まれる11項目、葛藤尺度に含まれる9項目、独立欲求尺度に含まれる8項目において、それぞれ尺度ごとの合計得点を算出し、それぞれの尺度得点(以下、それぞれ依存得点・葛藤得点・独立得点とする)とした(Table 1)。

Table 1 各尺度の平均点

	度数	最小値	最大値	平均値
依存得点	503	14	55	42.29
葛藤得点	503	9	44	18.80
独立得点	503	10	40	29.36

2 イメージ画

イメージ画の分類に関しては、やまだが提案する母子関係の発達形体を参考に、「包む母と入れ子の私」というやまだの定義した構図を基本として、「ひとつになろうとする母と私」(以下図・表内では「一体化する母と私」と表記する。)という筆者独自の分類を行った。なおこれは、従来やまだが行っていた9つの母子関係の発達形態を、分化か未分化かの2軸に単純化して、共有部分のあるもの(Fig.1右)に関しては「包む母と入れ子の私」に含めて「ひとつになろうとする母と私」としてカテゴリー化した。この「ひとつになろうとする母と私」というカテゴリーにおいて、「包む母と入れ子の私」の構図と、それ以外のものに関して、各尺度における有意差は出なかった。

このようにして行ったイメージ画の分類に関して、依存欲求・独立欲求・葛藤のそれぞれの尺度との関係を検討した。なお、それぞれのイメージ画に対しての詳細な内容吟味については、やまだが行っているので、今回の例図においてイメージ画とともに書かれた説明文は、必要と思われるものにしか付けていない。

「ひとつになろうとする母と私」の構図は、Mahler (1967)[8]の定義する「正常な共生期」から、母親と子の分化である「分離－個体化」の第一段階にいたる「練習期」に入るまでを参考に想定したもので、非分化的な一体感にあった母親と子が、完全な別個体として分化するまでの状態を考えている。したがって、「ひとつになろうとする母と私」は、「包む母と入れ子の私」のようにあきらかに母親と自分とが一体化した状態で描かれているもの、またその一体化からの分離過程であり、完全には分化していない状態のもので、二個体でありながらまるで一体であろうとしているかのような母と娘の構図とした(Fig. 1)。そして、この「ひとつになろうとする母と私」以外の構図を、その関係性はどんな形であるにしろ、母親と完全な別個体として分離しているものと見なし、「分化した母と私」と名づけることにした(Fig. 2)。

Fig. 1 「一体化する母と私」

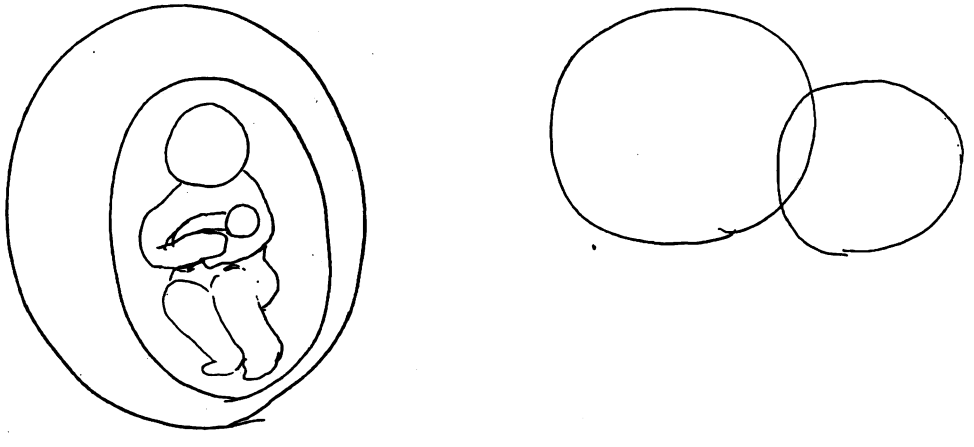
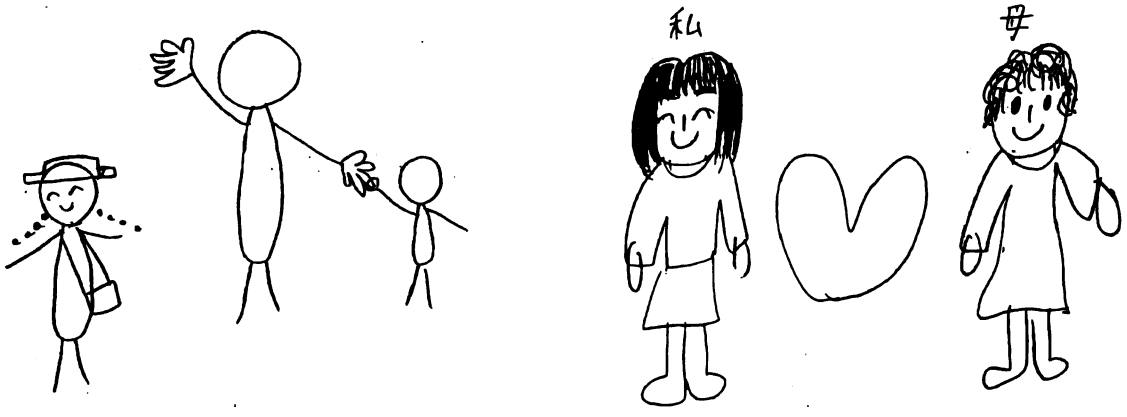


Fig. 2　「分化した母と私」



なお、この分類に関しては、筆者ら二人において、90%以上の一致率であった。また、この分類において幼い頃のものと現在とでχ二乗検定を行った結果、幼い頃と現在の構図には有意な差が見られた（χ2値=30.507，自由度=1，p<.01）（Table 2）。

Table 2　「一体化する母と私」と「分化した母と私」の比較

	幼い頃・現在（人）		
	幼い頃	現在	合計
「一体化する母と私」	158 31.4%	84 16.7%	242 24.1%
「分化した母と私」	345 68.6%	419 83.3%	764 75.9%
合計	503 100.0%	503 100.0%	1006 100.0%

幼い頃は30%近く見られた「ひとつになろうとする母と私」の構図は現在の関係においては約15%に減少し、「分化した母と私」の構図が8割以上を占めていることがわかる。

3 イメージ画と各尺度得点との関係

幼い頃、現在それぞれにおいて、イメージ画における「ひとつになろうとする母と私」もしくは「分化した母と私」の構図と各尺度得点においてT検定を行った結果、有意な差は見られなかった（Table 3，4）。

Table 3　「一体化する母と私」および「分化した母と私」の2分類による依存欲求・独立欲求・葛藤得点の差（幼い頃）

		N	平均値	標準偏差	t 値
依存得点	「一体化する母と私」	158	43.13	6.44	1.77
	「分化した母と私」	345	41.91	7.50	
葛藤得点	「一体化する母と私」	158	17.99	6.84	−1.78
	「分化した母と私」	345	19.17	6.94	
独立得点	「一体化する母と私」	158	29.53	4.63	.50
	「分化した母と私」	345	29.29	5.10	

Table 4　「一体化する母と私」および「分化した母と私」の2分類による依存欲求・独立欲求・葛藤得点の差（現在）

		N	平均値	標準偏差	t 値
依存得点	「一体化する母と私」	84	42.43	6.76	.19
	「分化した母と私」	419	42.27	7.29	
葛藤得点	「一体化する母と私」	84	18.36	7.32	−.64
	「分化した母と私」	419	18.89	6.85	
独立得点	「一体化する母と私」	84	29.50	4.45	.28
	「分化した母と私」	419	29.33	5.06	

幼い頃・現在の両時期を描いてもらったイメージ画において、「ひとつになろうとする母と私」の構図であっても「分化した母と私」の構図であっても、被験者の依存欲求・独立欲求・葛藤に違いは存在しないことがわかる。

また、幼児期のイメージ画における構図が「ひとつになろうとする母と私」の形であるもののなかで、現在のイメージ画における構図が同様に「ひとつになろうとする母と私」の形をとるものと、「分化した母と私」の形に変わったものとでT検定を行った結果、こちらも有意な差は見られなかった（Table 5）。

Table 5　幼い頃の「一体化する母と私」の構図から、現在の画における構図の変化による依存欲求・独立欲求・葛藤得点の差

	現在のイメージ画	N	平均値	標準偏差	t 値
依存得点	変化なし（「一体化する母と私」）	49	42.94	6.57	−.25
	「分化した母と私」	109	43.22	6.41	
葛藤得点	変化なし（「一体化する母と私」）	49	18.41	7.37	.52
	「分化した母と私」	109	17.80	6.61	
独立得点	変化なし（「一体化する母と私」）	49	30.04	4.42	.94
	「分化した母と私」	109	29.29	4.73	

同じく、幼い頃のイメージ画における構図が「分化した母と私」の形をとるものの中で、現在においては「ひとつになろうとする母と私」の関係を描いたものと、変わらず「分化した母と私」の形であったものとでT検定

を行った結果、有意な差は見られなかった（Table 6）。

Table 6　幼い頃の「分化した母と私」の構図から、現在の画における構図の変化による依存欲求・独立欲求・葛藤得点の差

	現在のイメージ画	N	平均値	標準偏差	t 値
依存得点	「一体化する母と私」	35	41.71	7.04	−.16
	変化なし（「分化した母と私」）	310	41.93	7.56	
葛藤得点	「一体化する母と私」	35	18.29	7.34	−.79
	変化なし（「分化した母と私」）	310	19.27	6.89	
独立得点	「一体化する母と私」	35	28.74	4.44	−.66
	変化なし（「分化した母と私」）	310	29.35	5.18	

したがって、「ひとつになろうとする母と私」・「分化した母と私」の両構図において、幼い頃も現在も変わらない形であるもの（幼い頃・現在共に「ひとつになろうとする母と私」の構図、もしくは幼い頃・現在共に「分化した母と私」の構図）と、幼い頃から現在のイメージ画に至って、構図が違っているもの（「ひとつになろうとする母と私」から現在は「分化した母と私」へ・「分化した母と私」から現在は「ひとつになろうとする母と私」へ）と、どちらの推移をとったにしても、被験者の依存欲求・独立欲求・葛藤に違いは存在しないことがわかる。幼児期から現在の画に至ってあきらかである構図の変化の有無も、本研究で用いた、被験者の依存欲求・独立欲求・葛藤という尺度において見る限りは、全て平均的であり、特に差は見られないのである。

考察

イメージ画における母親との一体化状態と、分化状態を定義して、そこにおける依存欲求・独立欲求・葛藤の違いは、幼い頃、現在のどの軸でとらえても見られなかった。まず、幼い頃のイメージに関しては、まだ自立の段階にいたっていないために、その頃のイメージ画で測っても、依存や独立の問いに対して差が出ないのはもっともかもしれない。幼い時点の母親イメージが、分化しているものであっても、一体化状態のものであっても母親への現在の依存や独立への葛藤に変化はないのである。

現在、幼い頃、両時期における「ひとつになろうとする母と私」と「分化した母と私」の違いによる依存欲求・独立欲求・葛藤のそれぞれの尺度での詳しい得点の差は、Table 3,4に示す通りであるが、幼い頃の各尺度の平均点と比べても、現在の平均点に、より差が見られないことがわかるだろう。「包む母」は「のみこむ母」であり、「死へとひきずりこむ母」でもあるから、それを父性原理によって切断し、包まれることを拒否して自立することが発達の課題であるといわれてきた。現に、長尾によるBlosの「青年期の親からの分離－個体化過程」[9]を参照しても、親との共生期などというものは、青年期では定義されていない。青年期にある現在において、母と分化しているのは当然のことであり、その距離感に様々なパターンはあるにせよ、一体化しているなどということはありえないのである。ところが、今回の調査における「ひとつになろうとする母と私」は、青年期においては一見特殊で不適切に見えるが、「分化した母と私」のイメージを持つものと各尺度において差異がないという点で、イメージにおいて全く母から分化していない「私」でも、母に対して過依存でもなく、かといって依存していないわけでもないことがうかがえる。

ここで少し、現在における「ひとつになろうとする母と私」のイメージ画を具体的に検討してみる。やまだは「包む母と入れ子の私」が必ずしも肯定的な「抱きかかえる母」ではないことに言及しているが、本研究における「ひとつになろうとする母と私」も同様にして母とひとつになろうとするほど近い存在であることは、肯定的でもあり、否定的な場合もある。それがどのようにしてとらえられていても、「ひとつになろうとする母と私」はあくまでその構図により分類した。したがって、そこにいる母のイメージはあたたかく包むものでもあるだろうし、子どもを意のままにコントロールするための手段としての「包む」である場合もあるだろう（Fig. 4 − A）。

もちろん、否定的な意味での「ひとつになろうとする母と私」（この場合はむしろ「ふたつになれない母と私」と言うべきかもしれないが）と肯定的な意味のそれとでは、そこにおける描き手の心理は大いに違うものであろうし、それに関しては今回の調査では測定できない。

やまだは「包む母と入れ子の私」に関する説明の中で母と子が親子で包まれている構図を「親子で入れ子」と表し、その構図に関して、「ずいぶん考えあぐねたが、いくつものバリエーションを見ていると、まるで、風呂や壷の中には誰も入っていなくても、母だけが入っていても、母と子が入っていても、基本的には皆同じであるように思えてきた。（中略）そのようにしてみていくと、母は場所でもあり、場所のなかの入れ子にもなりうるわけである。いずれにしても場所としての母は、具体的な母の像を超え、母さえも入れることができるものであろう。」と説明している[10]。入れる側でも入れられる側でも、より大きい次元で「包む包まれる」という関係性で見れば同じなのである。肯定的・否定的感情にも同様のことが言えないだろうか。母親に対する否定・肯定、どちらの感情も一義的ではないのだから、両者とも「ひと

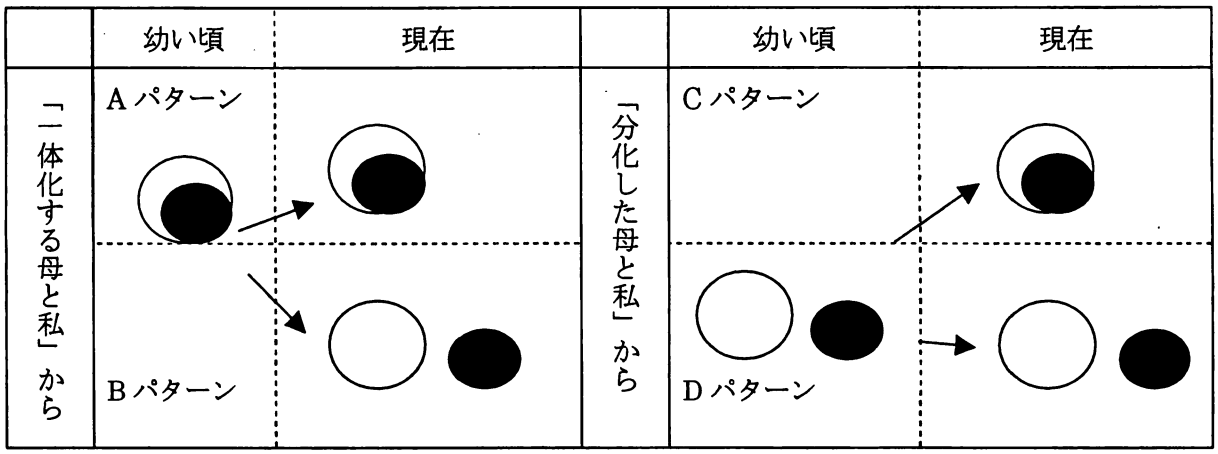
つになろうとする」母と娘の関係という共通概念でくくってしまうことは、決して相反するものを混同してしまっているとは言えないと考える。

あきらかに依存的だと思える母と娘の一体化したイメージや、依存的には見えず、むしろ協力的な関係に思われる母娘の一体化、上述した否定的イメージを連想させる一体化した関係など、「ひとつになろうとする母と私」にも様々なパターンがある（Fig. 4, 5, 6）。それぞれの絵に対しての詳細な内容吟味については、やまだの「包む母と入れ子の私」イメージに関する解釈にほぼ従うこととした。しかし、そこにどのような関係性や意味、バリエーションがあるとしても、現在における「未分化」な母と私のイメージが、決して分化した母と私のイメージに比べて依存的でないということは、非常に特徴的である。「青年期」における母からの物理的・心理的自立（それをイメージするならば「分化した母と私」になりがちではないだろうか）という課題に関して、「ひとつになろうとする母と私」というイメージは決してそれを妨げるものではないのだ。Mahlerは幼児期の母子関係における分離個体化において、「正常な自閉と正常な共生は非分化 nondifferentiation の最初の2段階である…（中略）…そしてこの段階の痕跡は、生涯 life cycle 全体を通じて残存するのである。」と述べている[11]。また、根垣(2000)[12]は、母と私のイメージに関して、やまだ同様の調査方法で10代・中年・高齢者を研究し、中川(1999)[13]の大学生の研究とあわせて、「包む母と入れ子の私」のイメージが確実に中年、高齢期に至るに従い増加する結果を得ている。すなわち、可能性としては「ひとつになろうとする母と私」のイメージが年齢を重ねるごとに増加することが考えられる。すると、今回の「ひとつになろうとする母と私」イメージはまさに、依存や独立などの要因とは無関係に、Mahlerが指摘する「生涯 life cycle 全体を通じて残存する」重要なイメージの形[14]、というものになりうるのかもしれない。

現在における「ひとつになろうとする母と私」のイメージは依存欲求や独立欲求、葛藤に関して「分化した私」と違わないことはわかったが、次に、これを幼い頃からの発達という軸で経時的に見る。ここでは、幼い頃から現在に至るイメージ画の構図変化による、被験者の依存欲求・独立欲求・葛藤の違いは全く見られなかった。このことをもう少し詳細に考察したい。

Fig. 3 に発達的にとらえた「ひとつになろうとする母と私」のイメージ画の分類を示す。

Fig. 3　母子関係の幼い頃から現在への変化　　○＝母　●＝子



ここに示したAパターン、Dパターンは、始まり（幼い頃）が「ひとつになろうとする母と私」か「分化した母と私」であるかという違いはあるが、どちらも幼い頃、現在の母と私のイメージが一体化か分化かという視点では「変わらない私」である。逆に、Bパターン、Cパターンは始まり（幼い頃）が「ひとつになろうとする母と私」か「分化した母と私」かであるにせよ、現在では幼い頃と違う母と私のイメージを描いている。

まず、一体化から分化へのBパターンであるが（Fig. 5）、これは度々述べてきた、西洋的な発達様式である「未分化から分化へ」と一致するものであり、一般的に受け入れられているものである。また、分化から分化へというDパターンも（Fig. 6）、最終的には自立と分化を目指す従来の発達様式にそう違わないものであろう。幼い頃の

イメージを幼い頃のどの時代、どの地点でとるかということは描き手次第で任されているので、それがMahlerの定義する「共生期」をイメージしてとれば「ひとつになろうとする母と私」であるし、「練習期」や「再接近期」もしくはもっと後の完全な分化期以降ととれば「分化した母と私」であるだろう。

注目すべきは、Aパターン「ひとつになろうとする母と私」のままの母娘関係である（Fig. 4）。これは完全に従来の発達様式にのっとっていない。未分化な出発点はいいが、母と私はイメージ上はそこから分化しておらず、依然として未分化なままなのである。幼い頃と20歳前後の現在において変わらず未分化な母と私といえば、「未熟」「大人になれない」などさまざまに、そしてあまり肯定されるとは言いがたい状態とされるだろう。やまだは「変わらない私」として相変わらず母という入れ子から出ないままの私について述べている。「ましてその年齢になって、まだ母の胎内の『入れ子』で居つづけるとしたら、とんでもないと思われるに違いない。しかし、何度も言うようにそれは西欧の価値体系から眺めた場合にすぎない。[15]」

従来の西欧的発達観点からは、異端で未熟なものととらざるを得ないこの「ひとつになろうとする母と私」のままの母娘イメージであるが、しかし、今回の結果から「一体化」のままであっても、「一体化」から分化であっても、どのイメージ画のパターンにおいても、依存欲求・独立欲求・葛藤に違いはないのである。これは西欧の価値体系から眺めた解釈に対して一石を投じるものであろう。イメージにおいて一体化したままの母と私は、一体化から分化へ、分化から分化へなど最終的に分化を目標とした西欧形態にのっとったパターンと比べて、特に依存的であるわけでも、独立欲求が低いわけでもない。「未熟」で「大人になれない」というような考察を与える材料は存在しないのである。

加えて、従来の発達様式からの逸脱と言えば、Cパターンはその最たるものである（Fig. 7）。ここでは「未分化から分化へ」という発達様式を全く逆行している。分化したはずの母と私のイメージが、一体化した状態、すなわち「未分化」な状態に逆行しているのである。これはまるで退行のようにも見えなくはない。しかし、ここにおいてもこの西欧的価値観に逆行するイメージの様子は、一体化から分化への西欧的に正しい発達形式にのっとったイメージの推移と依存欲求も独立欲求もなんら変わりない。これは、「変わらない私」の構図を「一般的で基本的なかたち」なのではと提案しているやまだの結論を支持するものである。

本研究においても青年期には「分化した母と私」のイメージ画が8割を占めていることから、「変わらない私」すなわち、一体化したままの母と私を「一般的で基本的」としてしまうのは少々論理の飛躍かもしれない。しかし、少なくとも依存や独立という青年期の親に対する重要な発達課題において、「分化していく母と私」が一般的なもので、「ひとつになろうとし続ける母と私」が特殊であるということはできないだろう。

まとめと今後の課題

本研究の目的は「従来の西欧の枠組みで『未分化』『依存』とネガティブな概念でとらえ、『未分化から分化へ』『依存から独立へ』向かわねばならないとする発達様式」（やまだ,1988）への疑問であり、過剰に依存的でもなく、離れすぎてもいない「母親との適度な心理的距離」はどのようなものなのか、という問いに対しての研究であった。

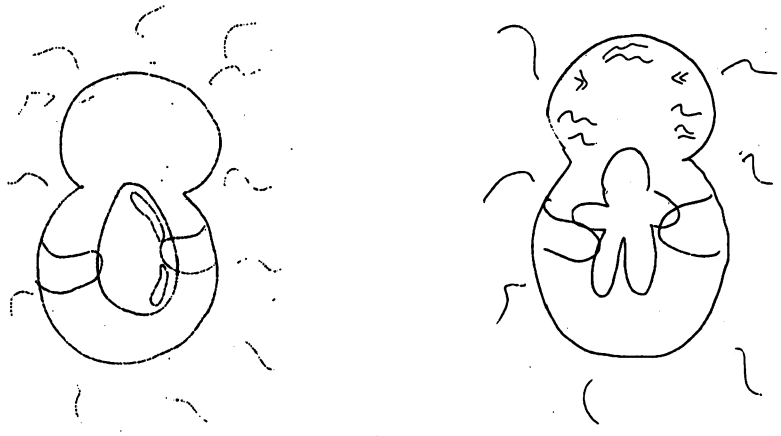
やまだが定義した「包む母と入れ子の私」そして今回筆者がそれをもとに定義した「ひとつになろうとする母と私」というイメージ上の母娘関係は、一見すると「未分化」な私の代表である。しかし、それは母と「分化」した私と比べて依存的でもなく、また独立心が強いわけでもない。西欧との比較研究は行われていないため、実際に西欧においてこの母娘関係のイメージがどのようなものになるかはわからない。しかし、本研究の結果は、母娘関係は、従来言われてきたような単純な未分化から分化へという発達理論では捉えられないことを示唆している。

また、本研究では、井上の青年期における親との関係においての依存－独立の葛藤尺度を用いて行ったため、一般的な大学生の親への依存傾向や独立欲求を見ることはできるが、その依存欲求や独立欲求がどの程度のバランスを保てばよいのか、どんな風にバランスを崩すと問題であるのかという点にはいっさいふれていない。今後、臨床事例など、より個別的なデータを用いて依存や独立欲求と葛藤のバランスとイメージ画の関係を見る必要があるだろう。また、一口に「依存」と言ってきたが、その依存の質は被験者の年代によって大きく変わることも予測され、今後より幅広い世代、特に中高年層へのアプローチの必要性と、今回とは別の切り口から親への依存とイメージ画の関係を探っていくことが必要である。

Fig. 4　「一体化するままの母と私」パターンA

4－A

幼い頃　　現在



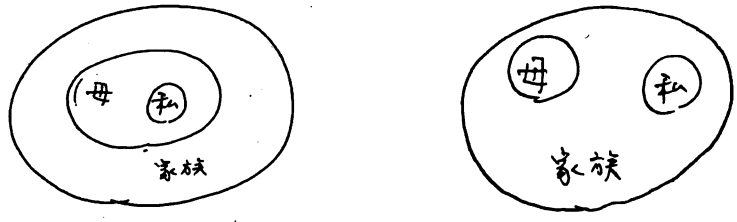
幼い頃は「卵として母に抱かれていた私」から、現在の「一人の人間として母に抱かれる私」へ

4－B

幼い頃　　現在

幼い頃に「母の腕に抱かれていた私」から、現在の「母の大きな手のひらの中でうずくまる私」へ

4－C　　幼い頃　　現在



幼い頃の「家族の中で母の中に包まれている私」から、現在の「家族という輪の中で独立する母と私」へ

Fig. 5 「一体化から分化へ」パターンB

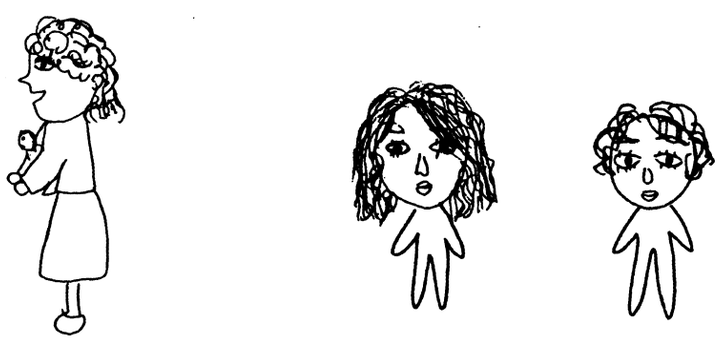
5－A

幼い頃　　現在

幼い頃の「母に包まれる私」から、現在の「並ぶ母と私」へ

5－B

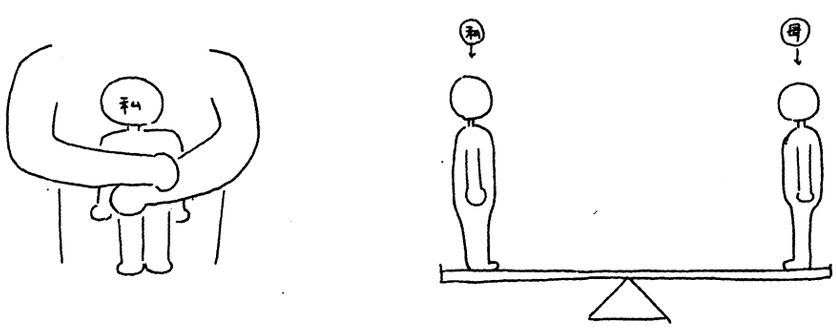
幼い頃　　現在



幼い頃の「母の腕に抱かれる私」から、現在の「並ぶ母と私」へ

5－C

幼い頃　　現在

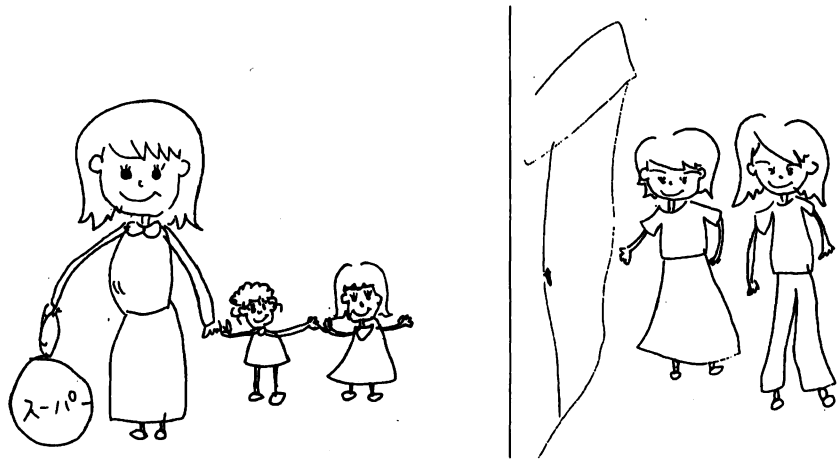


幼い頃の「母の腕に抱かれた私」から、現在の「バランスを取りながら向かい合う母と私」へ

Fig. 6　「分化したままの母と私」　パターンD

6－A

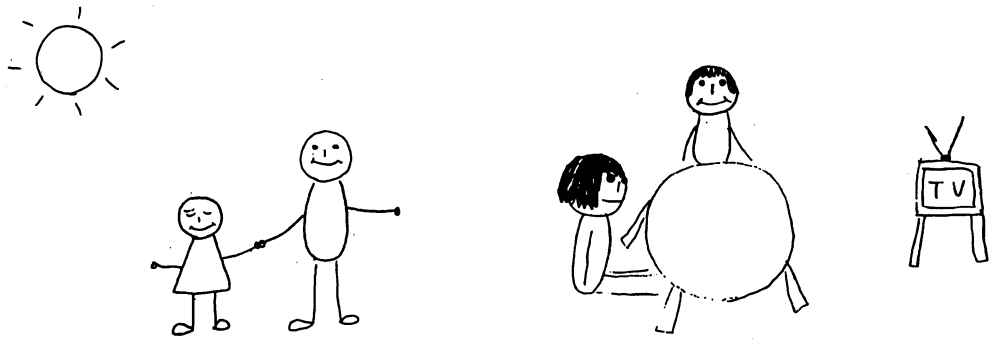
幼い頃　　現在



幼い頃の「母と妹と手を繋いでいる私」から、現在の「母と並んで出かける私」へ

6－B

幼い頃　　現在



幼い頃の「母と手を繋ぐ私」から、現在の「母と一緒にテレビを見る私」へ

6－C

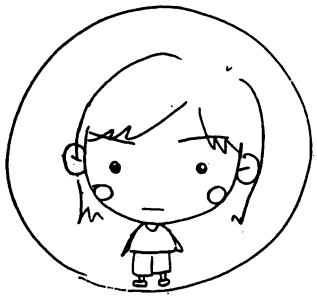
幼い頃　　現在

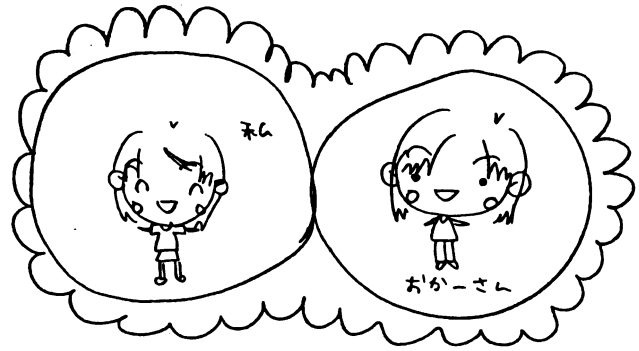
幼い頃の「母と並ぶ小さな私」から、現在の「母と並び等しい存在の私」へ

Fig. 7　「分化から一体化へ」パターンC

7－A

幼い頃



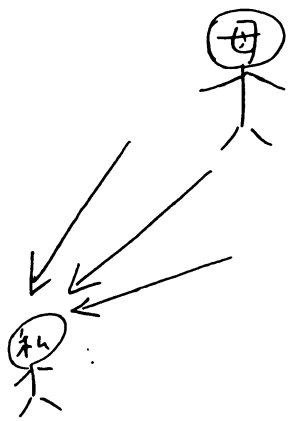


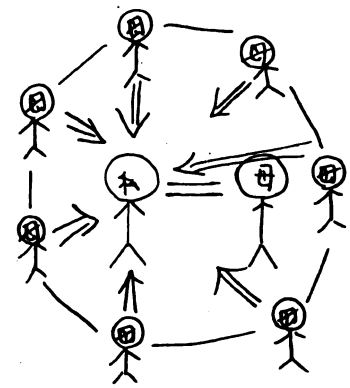
現在

幼い頃「上下に並ぶ別の玉の母と私」から現在の「互いの玉が触れ一つの大きな枠に包まれる母と私」へ

7－B

幼い頃　　現在





幼い頃の「落ちる母とうたれる私」と、現在の「母の存在に包まれ影響を受ける私」

引用文献

1) Connie,Z.: To be a woman: the birth of conscious feminine,St.Martin's Press, New York(1990)
(コニー・ツヴァイク編、川戸圓訳：『女性の誕生 女性であること:意識的な女性性の誕生』，山王出版,1996年)
2) やまだようこ：『私を包む母なるもの－イメージ画に見る日本文化の心理－』，有斐閣(1988)
3) Blos,P.: On adolescence:a psychoanalytic interpretation, Free Press, New York（1962）（P.ブロス：『青年期の精神医学』，野沢栄司訳，誠信書房，1971年）
4) 長尾博：『ケース青年心理学』，有斐閣(1991)
5) 2)に同じ
6) 2)に同じ
7) 井上忠典：青年期における親との依存—独立の葛藤の発達的変化，上越教育大学研究紀要，19(1)，280 - 283（1999）
8) Mahler,M.S.,Pine,F.,Bergman,A.: The psychological birth of the human infant,New York, Basic Books（1975）
(M.S.マーラー，高橋雅士訳：『乳幼児の心理的誕生』黎明書房，1981年)
9) 4)に同じ
10) 2)に同じ
11) 8)に同じ
12) 根垣奈未：イメージ画とSD法における母娘関係の世代間考察，大阪市立大学卒業論文（未公刊）（1999）
13) 中川美代香：母なるものと「私」，大阪市立大学卒業論文，（未公刊）（1998）
14) 8)に同じ
15) 2)に同じ

イメージ画にみる母と娘の関係

－母親への「依存・独立・葛藤尺度」との関連から－

根垣奈未・岩堂美智子

要旨：503名の青年期の女性を被験者に、母親と自分との「幼い頃」および「現在」の関係をイメージ画に描くことを課題とし、さらに、28項目の親との依存・独立・葛藤をはかる質問紙への回答を求めた。イメージ画と三つの尺度の得点との関連をみた結果、「母親とひとつになろうとする（一体化する）私」のような一見、過依存的な関係に見えるイメージを描いた者であっても、母親と自分が独立しているイメージを描いた者と、三つの尺度、および二つの時期、いずれにおいても統計的には有意な差がみられないことが明らかになった。この結果から日本の母娘関係は単純な未分化から分化へという発達理論では捉えられないことが示唆されると考察された。